

PHD LETTER

47

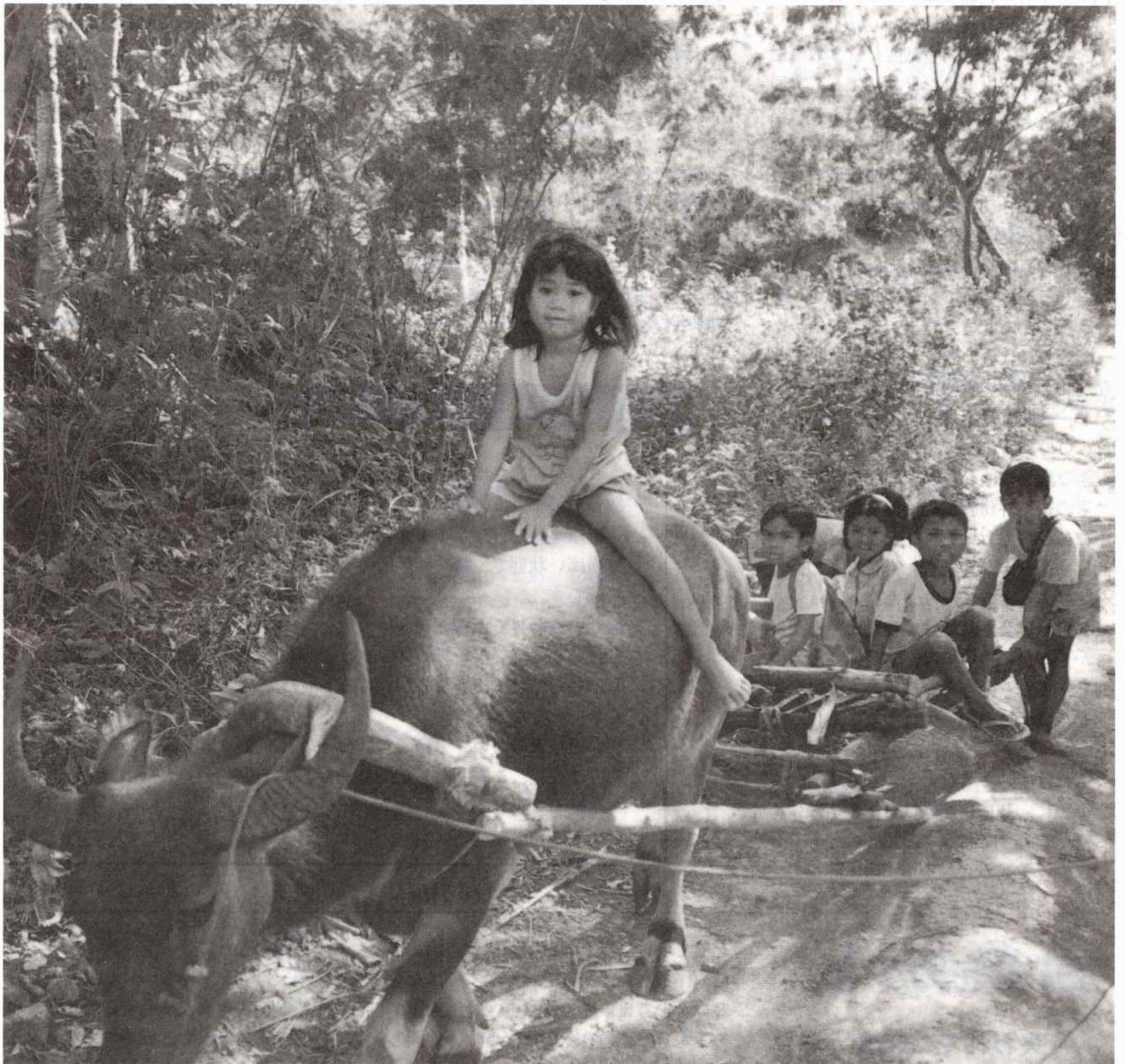
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1993・6

- スリランカフォローアップレポート 3P
- 研修生レポート 4・5P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地 賢一
住所:〒650神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
郵便振替:神戸1-29688 財団法人ピー・エイチ・ディー協会
定 価:100円



(フィリピン、ネグロス西州)

カラバオ(水牛)のひくソリに乗せてもらって午後の下校。山道をズリズリ言わせながらカラバオはゆっくり歩みます。“帰ったら お手伝いが待ってるかなア。”

NGOとしての足腰強化を

1989年に日本政府は「NGO補助金制度」を発足させました。この制度がスタートするまでの数年間は関西のNGO協議会などを場に外務省との懇談が続けられました。

政府がこの制度を発足させるについて私は基本的に賛成しながらも、若干の留保する思いがありました。

それは、この補助金制度が日本の市民社会の中から生まれた世論によって実現していくという民主的な流れが十分に出来ていないこと、むしろ援助をする18カ国で構成している国連経済開発機構(OECD)の中の開発援助委員会(DAC)参加国の意見とか、主に欧米の政府、市民などからの日本政府への批判に応えようとして進められているのではないかという感じがありました。

関西のNGOの間でも私の持ったような疑問を同様に表明する団体もありましたが、補助金を受けるかどうかは個々のNGOの判断に任せられることですから、大きな議論にはなりません。

その後、外務省は経済協力局政策課の中にNGO協力センターを設置し、具体的に補助金申請、審査、交付などの作業を開始するようになりました。

PHD協会としては「補助金」を受けるかどうかについては、事務局会議で検討し、またその考えを理事の人々にも説明し、当面は申請を留保することにしました。

それは次のような考えからです。

第一に、PHD運動は日本の市民による富、能力、時間などの10%の分かち合いによって進められる市民の国際協力、

交流、連帯の活動である。従って、あくまでもこの志とそれに基づく浄財を活動の基盤に据える。

第二に、PHD運動は草の根の平和、健康を自ら作り出す人づくり運動である。ところが、政府補助金は第三世界にモノを持っていくというのであれば該当するけれど、ヒトの育成については、特に日本に研修生を招く事業というのは対象外である。その意味でPHDは補助対象とならない。

このようなことで、私達は今までより更に力を尽くして、より多くの人に会員になってもらい、またポケットマネーを寄附していただくためのお願いをしてゆこう、と考えました。しかし、私達は政府の金は頭から受け付けられないという硬い態度でなく、今はヤセガマンしてでも、

NGOとしての足腰をしっかりとさせる、つまり、会費と寄附を基に自分達のできる範囲で頑張る方が大切、と考えました。

その後、少し政府補助金とは性格の異なる「郵政省ボランティア貯金」によるNGO支援が始められましたが、これについても前述のような考えで、今しばらく留保しようと考えています。

以上のような理由で、今私達スタッフは、出来得る限りの努力をして、いろいろな機会に会員としてPHD運動を支えて欲しい、研修生の日本における研修費を寄附して欲しい、また息の長い、組織的、専門的運営を可能にする人件費、事務所経費等の固定費を財団の基本金拡充によってまかないたい、と訴えています。

どうぞ読者の皆様、会員の皆様、寄附者の皆様、今一度私達の思いをご理解下さりご協力、ご支援を下さいますよう、心からお願い申し上げます。

総主事 草地賢一

～会員拡大キャンペーン'93～

PHDは研修指導者や滞在家庭、ボランティアとして様々な形で関わって下さる方々によって支えられていますが、財政的なご支援も研修事業を行なう上で必要不可欠です。しかしここ数年来会員数は横ばい状態で、特に昨年来の不景気で今年の見通しは大変厳しい状況です。

というわけで、現在新しい会員を大々的に募集しています。まだ会員になっていないアナタ、ぜひご参加下さい！また、周りに協力していただけるような方がいらっしゃればご紹介下さい。資料等送らせていただきます。

会員拡大のため、事務所ではない知恵を絞っておりますが、ご提案、ご意見、ご質問などぜひお寄せ下さい。PHDはみんなが支える運動です！どうぞよろしく。(担当 柳下)

日本をカタる。

失われてこまる豊かさ

カンボジアで2人目の犠牲者が出て以来、多くの議論が巻き起っている。行くべきであった。派兵はまちがいであった。戦争には犠牲者つきものであってしようがない。何故、外国の混乱の犠牲に日本人がならなきゃいけないんだ。日本も世界の大国であって、国際貢献はやむをえない事であり、その上での犠牲はしようがないなどなど…。

しかし、国際貢献という時、その本質

を見ていけば多くの疑問が残る。例えば何故、日本が国際貢献をしなくてはならないかを考えると、やはり、経済大国であるから、今の日本の豊かさは、他国との関係によって成り立っているから、金もうけばかりに走って、何か別の国際的貢献がないと、他国の手前、気まずくなるということらしい。

じゃー何故、他国の手前、気まずくなっちゃいけないのかというと、やはり、やっとなんか手に入れた豊かさ、つまり日本が経済大国であるという、その地位が奪われる事を恐れていることであろう。

でも、失われてこまる豊かさというものは、何でできあがっているのか？戦争

して兵器を売ってインフレ調節することか？第三世界を食いものにしてその犠牲の上でBMWを乗りまわすことか？安い農産物、安い労働力、安いコストを第三世界から買って国内の農民や中小企業家、労働者をなかせることか？

今、第三世界では、土に根ざした百姓達の伝統文化は破壊され、我々が恐れてやまない、「失われてこまる豊かさ」のうけ売りがはじまっている。うけ売りの主役は、政治屋でも、大企業の社長でもない。我々自身の内に住む「失われてこまる豊かさ」という怪物じゃーないだろうか。

百姓 橋本慎司

スリランカ フォローアップレポート

昨年7月に実施したスタディツアーよりアジャンタさん(6期生)を中心としたグループのヨーグルト作りへの支援を試みてきました。有畜複合農業の実践者である中野さんが大切な牛を家族に託してこの3月スリランカの村を訪ね、ヨーグルト製法の指導を行いました。

アジャンタさんとの再会

中野宗嗣 (兵庫県春日町 研修指導者)

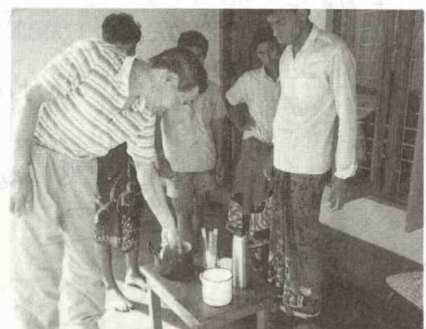
私にとって、今回のスリランカ行は20年振りの海外旅行となった。酪農をしている関係上、思うように休みが取れず、度々PHDより一度研修生の現地を見てほしいと言われ続けていたが仲々実現出来なかった。

今振り返ってみて、一週間のスリランカ行は生涯忘れられないような貴重な経験となった。またPHDのこうした働きは実に意義深いものであると再認識させられた。まず私が大いに啓発させられた事は、緑深く濃い事である。コロポ空港に夜着いて、車で約2時間ボヤワラーナ村の村長さん宅に一泊、朝耳慣れない小鳥のさえずりで目覚め、周囲を散策した。森の中の軒家である。背高いココナツの木が無数にあり、前庭には形の良いマンゴーの木が繁っている。パパイヤや、アボガドありジャックフルーツという初めて見る大きな果実をつけた木々。このような環境を楽園というのだろうかと行ってみて痛感した。

今私達の地域でも「丹波の森構想」という自然と調和した町づくりを目指しているが、公共施設だけでなく、農家の庭も箱庭のような庭園でなく、花と実が楽しめる果樹を植えたいとつくづく思うようになった。昨年建てた田んぼの中の牛舎のまわりに早速ブルーベリー、りんご、柿等を植えている。

その日の午後、目的地のアジャンタさん宅に、彼の愛用の自転車案内して貰う。これまた、日本で想像していたのと大違いで、実に素晴らしい環境である。新築の小さい家がまわりの緑とよく調和している。約1.5haの農園、家の周囲が全部自分の耕作地という、私達には考えられない理想郷である。そこに乳牛6頭を2年前より飼い、有畜複合経営を始めてくれた。牛を買うのに年収の何倍かを使い、新しいプロジェクトをよくぞ

思い切ってやってくれたと感動させられた。毎朝4時半に起きてランプの灯で搾乳をする。私も一朝同じように起きて作業を見せて貰った。朝1回のみ搾乳で、乳量はかなり少ないが購入飼料が全くないので当然だろうと思った。技術面より家族の人々が牛を可愛がり、まさに“家畜”として飼っている姿に多くを教えられた。特に笑顔の美しい少年の子牛を抱きしめる姿に接し、これだけでもスリランカにきた甲斐があったと思えた程である。日中はココナツの木の下で親子仲良く草を食べている何とものどかな風景であった。



今回の目的であったヨーグルト作りも2回行い、乳酸菌、試験管、魔法瓶等を使いよいものが出来上がる。アジャンタさん、ナンダナさんも共に来て、牛乳や器具の殺菌方法、温度を十分にチェックしての乳酸菌の培養方法を熱心に実習してくれた。今後の生産、販売については、幾つもの難関があると思うが、若いアジャンタさんの行動力に期待したい。またこの3月に帰国したががんばり屋のシャーンタさんを含め、四人のグループ「アジアのそよ風農場」にこれからも熱い声援を送り続けたい。

最後に、PHDでは受け入れ農家の主人に対していつも、お父さんと呼んでくれる良い習慣がある。日本にいる時はそれ程も感激しなかったが、異国の地でアジャンタさんから再び「お父さん」「お父さん」と食事のこと、暑さのこと、夜はよく眠れたかと、真心こめて気遣ってくれ、どんなに私の心を喜びで満たしてくれたかを記しておきたい。それをひとときの事とせず今後ともよき「お父さん」であってあげたい。

緑深きボヤワラーナ村がいよいよよい農村として発展してくれるように。スリランカの国が平和であり、その名前の通りこれからも「光り輝く島」であって欲しいと祈る。



誕生から3年

上原真理 (幼稚園教諭)

カレンの布と、私たちとの交流は'90年早々から始まりました。その時に名付けた“ソディー”というグループの名前は、カレン語で“卵”という意味です。“卵から何かを育てたい”という願いをこめてつけました。あれから3年一何かが育っているのかを振り返ってみると…。

●染めや織りが好きな人たちとのネットワークが広がってきました。
●布を通じてPHDの活動やアジアについて関心を持って下さる人が増えたetc…

なんといっても、色々な人と出会えたことが一番大きな収穫です。これからも、カレンの村の人たちにとってどんな援助が本当に必要なのかという“ソディーの原点”を忘れることなくカレンの布とつきあっていきたいと思っています。ひとりに“本当に必要な援助とは何か”と言っても、私には、到底答えられません。大切にしたいことは、村の人たちの生活の現状や様子を正確に把握し、私たちに何かができるのかということ、しっかり見極めていきたいということです。けれども、村の人々の様子を知るといってもタイの山岳地帯と日本では、あまりにも遠すぎることで、文章で意思疎通をしようとしても、メンバーにタイ語(もちろんカレン語も)を理解できる人が今はいないこと、逆に日本語を理解する村の人がプリーチャーさんしかいないことを考えていくと、困難なことだらけです。私のような小さな人間に、国際協力の何ができるのだらうとも思います。国際協力なんていう言葉を使うと、重すぎて歩けなくなってしまう。だから“布が好きでカレンの村の人たちと本当の友だちになりたい”そんな思いで、ソディーの活動を続けていきたいと思っています。どうか、いち度、ソディーのつどいに是非いらして下さい。お待ちしています。

- ソディーからのお知らせ
- ソディーのつどいを行なっています。
- 毎月第3土曜日 PM6:00～8:00
- みなさまのご意見をお聞かせ下さい
- ソディースタディツアー参加者募集中(残席わずか)
- 8/15(日)～18水信州の戸隠村で草木染めを体験します。興味のある方は、PHD事務所まで、連絡を下さい。

10期生フィリピン研修を経て帰国

研修生レポート

11期生は日本語研修の真っ最中

3月17日～28日/フィリピン、
ヌエバエシーハ州ガバルドン村

フィリピンでは、日本での研修成果に基づいて地域組織化 (Community Organization) を学びました。受け入れ団体であるSAFRUDI (Social Action Foundation for Rural Urban Development Inc.) は、1977年より同村に入り主に保健衛生、適正技術の分野で啓発、実践活動を行うNGOです。

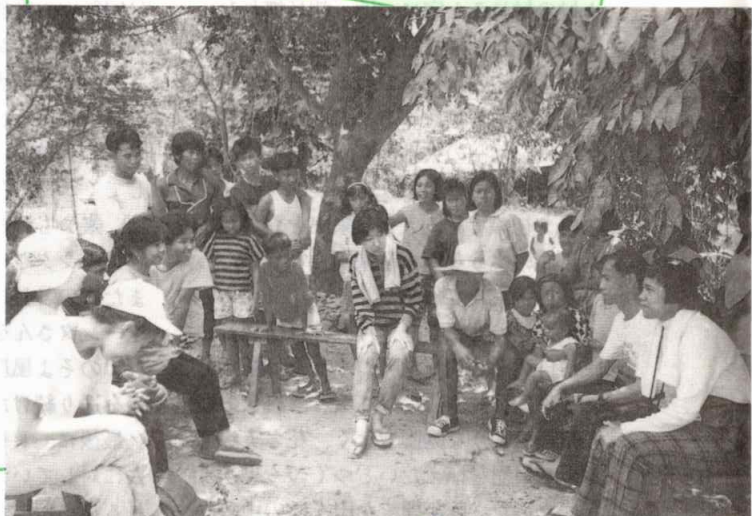
研修生は農業、保健衛生の研修で得た知識、技術を地域ぐるみの生活改善運動の一環としてどのように位置づけ、人々の理解と協力を得ていくのかをテーマにSAFRUDIの様々な活動を学びました。

その中で研修生からは、今回の研修を通じて薬草や手工芸などを実際に体験し、村人との交流で得たことは、知識よりも「自信と勇気」だとの報告を受け、研修生がそれぞれの村においてゆっくりでも着実な改善を進める上で、充実した研修を実施することができました。

このフィリピンにおける研修を最後に1年間の研修を無事に終えることができました。

1年間ご指導、ご支援を誠にありがとうございました。

フィリピン研修の思い出
 多くの仲間と過ごす時間は、一生懸命に生きていくための力になりました。
 ここでは、日本の生活と比べて、自然の恵みや、人々の温かさを感じました。
 特に、村長さんのご指導のおかげで、多くのことを学びました。
 これからは、帰国後も、SAFRUDIの活動を支援していきます。

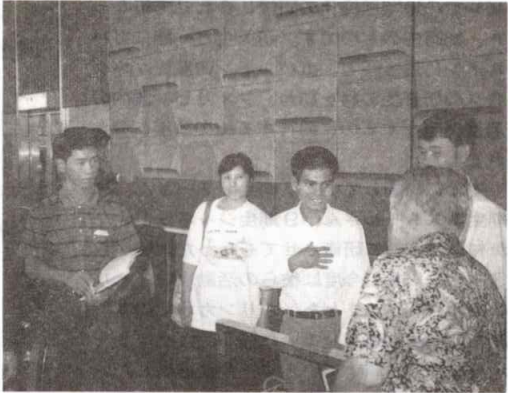


村づくりについて、村人と話し合う。

フィリピン研修の思い出
 多くの仲間と過ごす時間は、一生懸命に生きていくための力になりました。
 ここでは、日本の生活と比べて、自然の恵みや、人々の温かさを感じました。
 特に、村長さんのご指導のおかげで、多くのことを学びました。
 これからは、帰国後も、SAFRUDIの活動を支援していきます。

フィリピン研修の思い出
 多くの仲間と過ごす時間は、一生懸命に生きていくための力になりました。
 ここでは、日本の生活と比べて、自然の恵みや、人々の温かさを感じました。
 特に、村長さんのご指導のおかげで、多くのことを学びました。
 これからは、帰国後も、SAFRUDIの活動を支援していきます。

入国ビザ手続きのため予定より1カ月遅れ、5月11日に4名揃って来日した11期生は現在神戸YMCA学院専門学校ランゲージセンターとボランティアの方々のご協力のもと、日本語を一生懸命学んでおります。今回は、研修生の出身地域での生活の様子を中心に紹介いたします。



来日直後の11期生。これからが楽しみです。大阪空港にて。(左からトウンさん、ムーさん、ソコムさん、ヴァナさん。)

トウンティンさん(ビルマ)、 ムームーさん(ビルマ)

トウンさん、ムーさんの出身村ミャウタダインシユ村はマンダレーより約20km東に位置する農村です。

トウンさんは同村に生まれ育ち、両親と農業をしておりますが、8年前に独立しました。結婚後、親から譲り受けた田(約3反)でゴマ～米～豆を輪作で栽培しています。生計は米を換金して立てていますが、国産の化学肥料を購入しているために借金があり生活は楽ではありません。平均日当は45チャット(約900円、1チャット=約20円)程度。米は政府が約25%を買上げ、残りをマンダレーの消費者に売り収入を得ています。

ムーさんは村の保育園で3年前から保育士として働いています。園児は30人ぐらいで1.5～4.5歳の年齢の子どもがいます。保育園の1日のスケジュールはだいたい日本のそれと同様ですが、衛生状態に問題があるようです。子どもに多い病気としては、マラリア、皮膚病、眼病などがあります。ムーさんによれば、灌漑用水路の水を煮沸せずに飲用してい

ること、手を洗う必要性を理解していないこと等が問題だとのことでした。

日本での研修ではトウンさんは主に有機農業による稲作、堆肥づくり、また養鶏、野菜を、ムーさんは保健衛生、保育のカリキュラム、また簡単な応急処置などを学んできました。

ノップ・ヴァナさん(カンボジア)、 スム・ソコムさん(カンボジア)

ヴァナさんが生活し、ソコムさんが農業改良普及員として活動するチョンボク村はタケオから南に40kmに位置する農村です。村人の主な交通手段は徒歩かバイクで、最寄りの町に出るのに10分程かかります。村は400人ぐらいの人口で構成され、ほとんどの村人が農業(主に稲作)を営んでいます。

村の一家族は6～7人で子どもの数は3～4人程度。学校教育が整っているとは言え

せんが、クメール語(カンボジア語)の読み書きにはほとんどの人が不自由していません。

物価についてはカンボジア全体に共通して言えることですが、国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)が入って以来急激に上昇し、1ドルが約4,500リエル('93年3月現在)にまでなっています。例えばタバコ1本250リエル、卵1個600リエル、ビール1本3000リエル、米1kg800～1000リエルに対してソコムさんの収入は月給約3500リエルという状態です。

日本での研修は、ソコムさんは農業改良普及員として、今後予想される農業、化学肥料の増加に対応するために、元来豊かな土地を有効に利用する有機農業、また、知識や技術を地域に還元していくための方法を学んできました。

ヴァナさんは、ソコムさんとの協力で実践していくことから具体的な有機農業の方法について幅広く学んできました。

短期研修生 タニット・ ワンカチョンパンさん

(30歳、女性)
タイ、チェンマイ市
バヤップ大学研究員



1986年から継続している北タイとの交流で、これまでに長短期の研修生5人を迎え、農業、保健などの研修を実施してきました。帰国した研修生はそれぞれの村で少しずつ生活改善運動をはじめますが、フォローアップを続ける中で彼らが生産しつつある有機農産物をチェンマイ市で消費者グループを結成し産消提携運動をはじめたいという声があがり、今回この動きを組織的にまとめていくために研修生として来日します。日本での研修は、各地で展開されている有機農業運動、産消提携運動の理論と実践を学んできます。約2カ月間の短期研修となりますので、通訳同行で英語で学びます。(8月来日予定)

短期研修生 オリンピア・トレドさん

(30歳、女性)
フィリピン、ヌエバエシーハ州
ヘルスワーカー



オリンピアさんは、同州のガバルドン村でヘルスワーカーとしてボランティアで巡回しながら、健康、栄養、衛生状態を観察しながら地域の保健活動に携わっています。1年間のまとめの研修として左ページにご紹介いたしましたようにSAFRUDIの協力で同村に訪問し交流していく中で、SAFRUDIのボランティアとして働くオリンピアさんの保健活動における知識、技術をより深めたいとの要望があり、短期研修生として6月下旬の予定で来日し英語による研修を行います。今回の研修では、栄養、衛生分野を理論的に深めること、また日本の保健活動を見学しながら地域の取り組みの現状、問題点を学んできます。

第8回フィリピン スタディツアーレポート

今回のスタディツアーは、10期生のフィリピンでの地域組織化の研修に合わせて行なった、初めてのものです。研修生と一緒にガバルドンに残る組と、ガバルドンの農民がネグロスの研修生の村を訪ね、フィリピン国内の農民交流をするのに同行する組の二手に分れました。

すでに帰国している7期生ドミーさん、8期生ネストールさん、9期生ジャネットさんが村に戻る前に研修させてもらった地域から、3人の人たちが今度は彼らの活動現場、オリンガオ村を訪ねました。オリンガオでの有機農業の体験は充実していた様子、ガバルドンからお便りも届いています。今後継続したいとの希望も出ています。

以下参加者の声をお届けします。

ネグロスにて

荒木琢磨 明石市 会社員

私は、ガバルドン村の人達がネグロスの研修生の村を訪ねるフィリピン国内農民交流に同行しました。

いっしょに行ったのはフィリピンのNGO、SAFRUDIのガバルドン村のスタッフをしているワニトさん、百姓のエディーさん、ミノさんです。人と荷物を満載したバスやジブニーを乗りついで、ドミーさん、ネストールさんのいるオリンガオ村に到着したのは3月20日、ネグロスは最も暑い乾期の真最中でした。

オリンガオで泊めて頂いたのはカサマ(南ネグロス小農民協会)で活躍しておられるヘススさんジュラニーさん御夫妻宅。かわいい5人の小さな娘さん達や、ドミーさん、ネストールさんも私達を大歓迎してくれました。

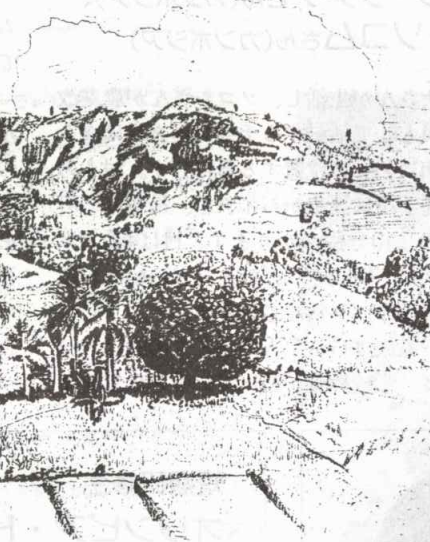
今回の農民交流はオリンガオで進められている堆肥やミミズを使った有機農業についてガバルドンの農民が体験を含めて学び、またお互いの状況について知り



堆肥作りを体験するガバルドン村の3人と指導するジェラニーさん(左)。(ネグロスオリンガオ村で)

合い分かち合っているというものでした。ガバルドンでは、水牛や牛の糞を直接肥料として用いるが竹のケースの中で土・バナナの茎等を混ぜて発酵させる堆肥作りは行われておらず、とても貴重な体験になったようでした。そしてミミズも従来フィリピンにはおらず、日本から輸入されたミミズをケースの中で飼育しているオリンガオの技術と、5百匹のミミズをガバルドンの3人が持つて帰ることになりました。ガバルドンではミミズを飼うケース作り、堆肥を作る為の試みが今行われつつあるところだと思えます。

私にとってこうして草の根で生活改善にとりくむ人達と出会えたことは、素晴らしい体験でした。いっしょに寝起きを共にしてみても、彼らの振舞いの自然さ、にじみ出てくる生きる上での豊かな知恵を感じることができたと思います。そしてまた、この体験は私の生活を見直してみるきっかけになっています。



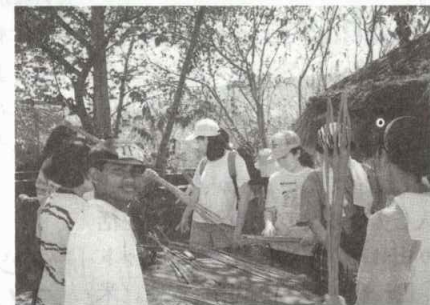
ネストールさん宅からみた田畑とイラガ山。(岩の山の意)

ガバルドンにて

ガバルドン時間

ガバルドンでは時間がゆったり流れていた。これは日本の農村の生活でもある程度は感じられるだろうが、日本の日常生活からは想像できないほどであった。例えばこんなことがあった。朝から保育園へ見学にいった日のことだ。午前中で子供達は帰ってしまい、その後残った私達と子供達のお母さん方でいろいろな話をした。話合いは留まることを知らず続

いた。日本の時間感覚を持っていた私は、昼食時間には終わるようにしなければと思い、昼食は何時からか、そっと聞いてみた。すると、意に反して、「これが終わったら」という返事が返ってきた。また、昼食休憩中、午後は何時から始めるのかとたずねると、「昼寝をしてから」と返ってきた。全く時間に縛られない。これがまさに、「ガバルドン時間」である。私はこののんびりした「ガバルドン時間」がすっかり気に入ってしまい、帰国時には「大阪時間」に戻るのが憂鬱であった。しかし、帰国して、すっかり以前の「大阪時間」の生活に戻ったわけではない。私の中の時間感覚が変わったのだろう。「ガバルドン時間」と全く同じようにゆったり、のんびりというわけにはいかないが、時間に縛られない技を身につけたようだ。



手工芸品作りを体験。(ガバルドン村にて)

すばらしい人に会いました

ガバルドンでリンダ・ネリーさんに出会った。リンダさんはSAFRUDIのスタッフとして村で生活しながら、村の人々自身で自分達の暮らしを変えていくように働きかけ、活動している。つまり、自分達がどういう状況におかれているのか、問題点はなにかを把握し、自分達で解決していけるように、組織化を行ない、人材を育てている。これは、自分の日々の生活だけにとらわれていては絶対にできない仕事である。村全体のことを考え、活動している彼女に接して、彼女の人間の大きさに感動した。

毎日忙しくても、彼女は家族と過ごす時間をとることを忘れない。たとえば仕事としての活動を少し休んでも、家族と過ごすことの大切さを感じているようだ。仕事の手を抜いているわけではない。新たな活力を得るためであろう。人と人との分かちあい進められる仕事をしている彼女は、人を、家族を思いやるのがいかに大切かということを実感しているようだった。

- 篠原登子 神戸市 学生
- 宮田早夏 堺市 学生
- 宮田祥子 堺市 学生

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1993年2月117件	2,109,205円
3月122件	2,589,839円
4月86件	3,051,990円
325件	7,751,034円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

〈「草の根生活塾」参加者募集〉

恒例の草生塾も9回目を迎え更に充実したものにすべく下記の通り実施します。
・アジアの草の根の青年たちとの交流を通じ異文化とのふれあい、より身近にアジアを感じるための機会とする
・農業体験から人間が生きていくための自然の尊さ、農業の大切さを知る。

7月21日～25日	4泊5日
兵庫県篠山町、丹南町	
定員	20名(小学校高学年以上)
参加費	18,000円(小・中・高)
	20,000円(大学・一般)
大学・一般の方はリーダー参加歓迎!	
申込締切	7月15日

〈ヤニさん、エニさんも待っている、スマトラツアー〉

インドネシア、スマトラ島西部の漁村パシ

〇月×日のPHD協会

総主事 草地 今年度は珍しく新人職員がいなくてもかかわらず、事務所にいる間、職員の更なる養成にと張り切る。ある晩の「寄合い」で研修生の村の様子を大いに語る。また念願の著書が出版となり、しばしの作家気分。

主任主事 藤野 10年来のオツトメのご褒美なのか1年の海外研修が当たる。さてさて研修生の気分はいかが?ヨソのNGOはいかなるものか 一次号より3回にわたり、海外レポートをお届けする予定。乞ご期待。

主事補 小松 ドングリの背くらべのような若手職員のみとめ役をおおせつかり四苦八苦。汗をかきかき髪をかきむしりながら夜遅くまで働く姿は相変わらず。たまには早く帰ってデートもしてね。

ルバルーとアイルバングスでの生活を体験するスタディツアー。今までに8名の研修生が帰国しており、彼らの活動を励ますとともに、国際協力のあり方を考えます。3月に帰国したばかりのヤニさんとエニさんが温かく迎えてくれることでしょう。

日程	8月16日～26日	10泊11日
コース	大阪～シンガポール～バダワン～パシバル～アイルバングス～プキティンギ～バダワン～シンガポール～大阪	
定員	14名	
費用	約235,000円	

〈丹波の森で林業体験〉

今年で3回目を迎える「枝打ち」合宿。林業体験と学習会を通し、熱帯雨林の問題や日本の林業の現状を学びます。何といても目玉はハシゴに乗っての枝打ちとチェーンソーを用いての間伐で、気持ちいい汗いっぱい流せませす。作業の合間に食べるごはんがこれまで最高!もちろん、研修生も参加します。

9月23日～26日	3泊4日
兵庫県丹南町	
定員	20名
参加費	18,000円
申込締切	9月14日

〈PHDの歩みをまとめた本 出ました〉

当協会の10年にわたる実践の歩みや、1年間の研修の内容が一冊の本にまとめられました。具体的な活動の紹介と同時に、南北問題や開発を考える視点、国際協力活動への提言

主事補 吉岡 10期生を送り出し、11期生の来日が遅れていたで研修生ナシの1カ月余、自分宛の電話がないと嘆く。この充電期から事務所で昼の自炊を始め、クーポン現在目標の掃除機のあとに炊飯器をリクエスト。

主事補 渡辺 藤野の留守を受け、総務・経理等を担当することに。10年のキャリアには追いつけなくとも、勝るとも劣らないユニークさで業務をこなす。夏は海へ魚とりに、秋は山へ枝打ちに…忙しくなりそうな気配。

囑託 柳下 毎日の業務で外出し、元町商店街で今はやりのサッカーリーグの選手を見かける。「カズを見た」と興奮して戻り、意外にもミーハーの一面を見せる。かたや、ビールつきの阪神巨人戦に総主事とお出かけ。

新聞紙上で募った、11期生の日本語復習のお手伝いへの問い合わせが1週間ひっきりなし。こんな反応見たことない、と事務所は大わらわ。研修生の日本語上達に期待大!です。

など、国際交流・協力についての幅広い内容となっています。PHDに関わっている方必読の書。ぜひ貴方のお手元にも一冊。

「アジアの草の根国際交流—PHD協会の実践」
草地賢一著 明石書店 2,500円
(事務所にもあります。ご注文下さい)

〈おまたせしました。マミムメセッション報告集完成!!〉

PHD運動10周年記念事業として、91年3月から11月まで行われたマミムメセッションの報告集が、1年数カ月の年月を費やし、遂に完成しました。報告集では9カ月の期間中、延べ8,000人の参加者のもと行われた27に及ぶイベントを網羅。ご希望の方は事務所まで、一部500円

〈ゆっくりじっくり、がんばっています〉

アジャンタさんたちのヨーグルト作りの取り組みが、NHKアジアマンスリーで紹介されました。

〈ちりも積もれば山となる! 書き損じハガキキャンペーン報告〉

1992年3月に始まった同キャンペーン、静かに盛りあがっておりますがこの約1年の報告です。
1992年3月～1993年3月
該当金額合計 564,443円
ご協力に深くお礼申し上げます。頂戴したハガキは書き損じ分は郵便局で切手に交換、未使用分は催し物の通知用などと大活躍です。引き続き、ご協力いただければ幸いです。

ウィンさんの「アイラブユー」

落合久恵

私は主婦!しかし家事全般にわたり、特に料理が苦手なのです。その私が、夫の夢をかなえるため(ホストファミリーをやりたいという)募集に応募して、ビルマのウィンさんの受け入れ家庭となりました。1年生になったばかりと4年生の息子たちは、当り前のように、すぐウィンさんを遊び相手にしていました。私の父はたまたま戦争中にビルマで4年間も過ごしたという事もあり、喜んで会いに来ました。そしてたちまち友達になり、忙しいウィンさんの研修の合間に京都、奈良へ案内したりしました。映画も一緒に見に行きたかったそうですが、時間がありませんでした。1年間はアツという間でした。3月17日、空港でウィンさんは見送りの人達と何度も握手をかわしました。最後に皆に向かって「アイラブユー」と言って旅立ちました。私の、そして皆の受け取ったこの言葉。私は心の中の宝物として大切にしていきたいと思っています。ウィンさんありがとう!



編集後記

去る5月11日、今年度研修生4名がついに来日。ただ今、日本語の勉強に励んでいます。研修生も教えるボランティアも一生懸命。早く上手になってね。

カンボジアからの2人には、連日の取材。PKO報道からは見えないカンボジア国民の日常生活、そしてその他のアジア諸国の状況をひとりでも多くの日本人が理解できるよう

な報道をマスコミには望みます。飢餓や圧政に脅やかされ、人間として当然持って生まれたはずの権利を奪われた人々。その一方で、平和で安全でモノがあふれる日本にいて何も知らない私たち。

このレターが皆さんの理解を深めるための一つ的手段になれば嬉しいです。

私なんかには何が動かせるのかしらって途方に暮れたりするけれど、PHDの仲間を見ていると元気が出てきます。全国に広がる支援のネットワークもとても心強く感じます。小

さい力が集まって大きな何かを動かすパワーになっていくのです。

今年もPHDでは夏休みにいくつかのイベントを企画しています。研修生との交流を通して楽しみながら、アジアと出会い、私たちの生活を振り返り、地球のことを考える、そんな時間を過ごしてみませんか。

ぶーこの妹

<編集メンバー>

相島美弥 荒木琢磨 江草マサ子
柿原登志夫 片岡はる

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。